2022 年度 FD 活動報告

フェリス女学院大学 FD 委員会
委員長（学長）　荒井　　真
副委員長（教務部長）　大畑　甲太

FD 活動の主な目的は「教員が授業内容・方法を改善し向上させること」にあり、また現代は、その活動を学内外に公表することが義務づけられています。フェリス女学院大学は、これまでも、さまざまな活動に取り組み、継続的に諸活動を推進してきました。

2022 年度は、新型コロナウイルス感染症への対応も 3 年目に入りました。大学 FD 講演会では「With コロナ／After コロナにおける授業のあり方を考える」、大学 FD 勉強会では「JV-Campus ～今後の展開の可能性を探る～」をテーマとして、これまでのコロナ禍で得たオンライン授業の経験とノウハウを生かしながら、学生本位の学びの実現とともに、学外にある貴重な資源の活用にも目を向け、これからの大学の授業運営において、私たちに何ができるかを考える機会をもちました。

2021 年度に取り上げたテーマ「障がい学生支援」についてさらに理解を深めたいという要望に応え、昨年度に引き続き大学 FD 勉強会を開催し、情報共有や意見交換をする場をもちました。

また、2022 年度も中期計画に沿って「各所管における FD 勉強会」を積極的に開催することとし、大学の FD 活動の活性化につなげることができました。

その他、例年どおり授業アンケートや学修行動調査、卒業生調査を実施し、学生の実態を把握するための情報収集に努めた一方、大学院では博士後期課程の学生に対して、教育能力向上のために FD 活動への参加を課すなどの取り組みも継続しています。

目　次

大学 FD 講演会「With コロナ／After コロナにおける授業のあり方を考える」 2
第 1 回大学 FD 勉強会「障がい学生支援を考える Vol.2（精神障がいや発達障がいのある学生を中心に）～私たちはどのように受け入れ、どのように支えるのか～」 9
第 2 回大学 FD 勉強会「JV-Campus ～今後の展開の可能性を探る～」 16
学修行動調査 20
授業アンケートと授業改善計画 21
卒業生調査 22
PBL 科目の推進 22
大学院の FD 活動 22
2022 年度活動内容 23

大学 FD 講演会「WITH コロナ／AFTER コロナにおける授業のあり方を考える」

概要

日　時：2022 年 11 月 7 日（月）15:30～16:55
会　場：オンライン（Zoom）
題　目：With コロナ／After コロナにおける授業のあり方を考える
プログラム：
◆開催の経緯、本学の現状について
◆事例紹介
◆質疑応答
◆全体のまとめ、今後の展望について
講　師：**フィリピン大学国際研究センター教授**
アンパロ・アデリーナ・ウマリ 氏
お茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環准教授
倉光 ミナ子 氏
コーディネーター：小ヶ谷大学 FD 委員会副委員長（教務部長）
対象者：本学教職員及び博士後期課程学生
主　催：　大学 FD 委員会

出席者：専任教員 18 名、職員 24 名、博士後期課程学生 1 名
アーカイブ閲覧：専任教員 1 名、非常勤教員 1 名、職員 5 名

【開催の経緯、本学の現状について】小ヶ谷大学 FD 委員会副委員長（教務部長）

2020 年度以降コロナ禍の中で、本学でも先生方のご協力のもと、様々な取り組みを行い、感染防止の観点を中心に様々な授業スタイル（全面オンラインや遠隔受講可としたハイドブリッド授業など）に挑戦してきた。

現在も予断は許さない状況とはいえ、With コロナ／After コロナという言葉が示すように、異なったフェーズに入ってきていることを実感している。これまでのコロナ禍で得たオンライン授業の経験とノウハウを生かしながら、新たな大学教育の展開が求められているといえる。学生本位の学びの実現とともに、学外にある貴重な資源の活用にも目を向け、これからの大学の授業運営において、私たちに何ができるかを考える機会としたい。

今回の FD 講演会では、お二人の外部講師から、それぞれの大学での授業運営における実践例をご紹介いただき、今後の検討に繋げていきたい。

【事例紹介】フィリピン大学国際研究センター教授　アンパロ・アデリーナ・ウマリ 氏（日本文学/日本伝統芸能研究）

国境を越えた教育の実践とグローバル教育に関する

「パンデミック前、パンデミックの間、および通常の状態に戻る中でのオンライン教育に関する当初の省察」

このプレゼンテーションは、①パンデミック（コロナウィルス感染拡大）前、②パンデミックの最中、および③通常の状態に戻る過程において、フィリピン大学国際研究センター教授として、オンラインで学生に知識を伝えていく中で考えてきたことを共有し、大学での教育、研究、創造的な仕事、およびその延長上にある自身の仕事を中心に話題を展開していきたい。

①パンデミック前のオンライン教育

パンデミック前は、私がフィリピンで共同して行っていた創造的な仕事への対応としてオンライン講義を行っていた。 2005 年にフィリピン大学国際研究センター（UPCIS）は、フィリピンで日本の能楽を実演するために教えることを開始したが、フィリピンでは日本とは異なり、能楽師が定期的に「おけいこ」やトレーニングとしてのレッスンを行うことができなかった。そのため、2012 年の公演に向けて、新たにフィリピン人の能楽師を訓練する際、私たちはオンラインの音声およびビデオ通信ができる Skype または「Sky Peer to Peer」を通して訓練を行い、それを「スカイプリハーサル」と呼んでいた。

能学師という指導者のビデオ録画を、「指導者」、つまり「手本」として使い、初めに自分たちで練習する。次に、「スカイプリハーサル」の際に、教室に集まり、スカイプを通して練習してきたものを日本の指

導者に見てもらった。そして、指導者からコメントをもらい、その指導に従い、正しい方法を示すことによって、そのパフォーマンスを修正していった。指導者が実演してくれる演技を観察し、模倣し、その型を繰り返し行うことによって、能楽のような無形文化遺産の学びを、Skype のようなプラットフォームを使いながら可能とした。

②パンデミックの最中のオンライン教育

COVID 19 （新型コロナウイルス）のパンデミックが引き起こした恐怖は、国内および海外への旅行制限につながり、最終的には学術交流プログラムの停止を余儀なくされた。

パンデミックの前は、仕事や個人的な理由で、海外に拠点を置き、マニラを訪れる研究者等の専門知識にふれることができた。しかし、その後のパンデミックのオンライン教育により、そのような人たちをリソースパーソンとして招待することで、講義内容に国際的な知見を加え続けることが可能となった。また、日本研究については、次のとおりウェビナーやオンライン公開講座を開催することができた。

□「人権の日」を記念する特別ウェビナーセッション

2020 年 12 月 10 日の「人権の日」を記念する特別ウェビナーセッションでは、「COVID-19 and Marginalized People in Japan」（COVID-19 と日本の疎外された人々）と題してフェリス女学院大学の小ヶ谷教授が、また、UPCIS のシンシア ネリ ザイアス教授は 「My Reaction to the Paper Presentation on Cultural Responses to Covid 19 by the Missionaries of Jesus (MJ) and the Tagakolo of Malita, Davao」（イエスの宣教師（MJ）とダバオのマリタのタガコロによる Covid-19 への文化的対応に関する論文発表に対する私の反応）と題して、連続講座が開催された。

□特別オンライン公開講座「生け花：安息のための花、希望の花」

「生け花」に関する特別オンライン公開講座は、コロナウイルスのために亡くなった多くの人々に敬意を表すものとして、オンラインで開催された。東京医科歯科大学の国文学教授であり、池坊いけばな学校の免許を持っておられるキタニ・マキコ先生は、その講演と実演に対して「生け花：安息のための花、希望の花」というタイトルを付けられた。

□「ヴァーチャルな文化交流クラス」（フェリス女学院大学）

UPCIS の「エクステンション・プログラム」の一部である学生の国際交流プログラムとして、UPCIS の学生とフェリス女学院大学の学生が相互に訪問することが困難であったため、「ヴァーチャルな文化交流クラス」を開催した。学生たちは、日本のさまざまな都道府県やフィリピンのさまざまな州からヴァーチャル・クラスに参加することができ、 リソース・スピーカーとして、ニューヨークを拠点とするフィリピン人デザイナー、元 UPCIS 講師であり、2019 NHK World Japan Kawaii International 6th Kawaii Leader でもある、トレーシー ディゾン氏をニューヨークから招くことができた。

□「JOY Exchange Program」（横浜国立大学）

UPCIS のパートナー大学である横浜国立大学 (YNU) は、「JOY Exchange Program」をオンラインで実施し、日本語コースを提供してくれた。フィリピン大学の人類学・修士の学生であり、UPCIS から 2020-21 年度の秋学期プログラムへの参加を推薦された UPCIS 能楽アンサンブル会員のローリーン・リオアナグさんが、YNU（横浜国立大学）留学生センターの日本語コースにオンラインで参加することができた。

□フィリピン研究会議「KAAGI Tracing Visayan Identities in Cultural Texts」

人形劇としてのフィリピンの文楽舞踊作品「Si Filemon」の翻案は、2020 年 7 月 2 日から 4 日にかけて、ロンドン大学の東洋アフリカ研究科で予定されていた第 6 回フィリピン研究会議 「KAAGI Tracing Visayan Identities in Cultural Texts 」で発表されることが決まっていたが、COVID 19 の状況により、主催者はその延期を余儀なくされ、最終的にはウェビナーで行われた。ウェビナーでの開催にあたり、あらかじめその舞踊作品のビデオ録画を作成。「Si Felimon」のオンラインでのプレゼンテーションと、その後の質疑応答のパネルディスカッションにはズームで参加した。

以上のように、パンデミックの間、UPCIS はウェビナーやオンラインでの公開講座、ヴァーチャル空間での文化交流クラスを開催し、オンライン国際会議に参加した。また、オンラインで書籍の刊行を企画したり、ヨーロッパ、カナダ、アメリカ、日本からの参加者とのオンライン円卓会議をフィリピンにて開催することなど、これらはパンデミック前では考えられないことだった。

③通常の状態に戻る中でのオンライン教育

通常の状態に戻る中で、私たちは情報技術の著しい進歩を十分に認識するようになった。 オンラインでのプラットフォームは、国際的な「つながり」のための便利なツールになり、現在、UPCIS におけるチームティーチングでのオンラインでの講義に加えて、アーティスト・スカラーとして、カナダのウィニペグ大学の演劇の学生に対して、演技コースの講座をオンラインで教えている。 また、東京医科歯科大学の日本人学生に対しても、日本の伝統的な演劇をオンラインで教えている。

今年の初め、日本女子大学主催の国際オンラインシンポジウム・パフォーマンス「フィリピンにおける日本古典文学研究とパフォーマンス」 で基調講演を行った。また、広島国際会議場で開催された「World Conference on Computers in Education (WCCE) 2022」という情報技術に関する会議で論文を発表した。ビザを取得せず、航空券を購入することもなく、フィリピンから日本に行くこともせずに全て行うことができた。パンデミック前には、まったく考えられないことであった。

E ラーニングを介した、国境を越えて海外の研究者との教育におけるパートナーシップは刺激的で、やりがいのある経験だった。それによって、私たちは講義を行い、授業を提供し、関係をもつ諸外国の学生、研究者、機関との共同での教育を形作ることができるようになった。

私は皆さんといま、ここ、フィリピン大学ディリマン校の私の居住地区を離れることなく、国境を越えた教育の実践とグローバル教育に関する「パンデミック前、パンデミックの間、および通常の状態に戻る中でのオンライン教育に関する当初の省察」という、このプレゼンテーションを共有できたことに感謝している。

【事例紹介】お茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環准教授　倉光 ミナ子 氏（地理学）

オンラインの実習とその成果

お茶の水女子大学文教育学部のグローバル文化学環は「グローバル化する世界の中で、他者への共感力と実践力をもった、新しい女性リーダーの育成を目指す学際的なコース」であり、大学の外に出て経験して学ぶ「実践力の涵養」が重要であるとし、実習科目を必修として位置付けている。本日の事例紹介では、「国際協力実習」における Before COVID-19 と After/With COVID-19 との比較において、思いがけない成果が得られたことについて報告したい。

①Before COVID-19 の「国際協力実習」

【科目概要】「国際協力実習Ⅰ～Ⅲ」（隔年開講）

・4 月に募集、志望書・面接→上限 12 名

・2006 年～2015 年タイで実施、2016 年～現在フィリピンで実施

＜主題と目標＞

1.フィリピンのスラムや農漁村にて長年にわたり国際協力活動を行っている認定 NGO 法人「アクセス - 共生社会をめざす地球市民の会」の活動の経緯、活動内容、関わり方等を学びます。

2.フィリピンの都市スラムや農漁村の人々の暮らしについて学び、共感を深めます。

3.都市と農漁村がそれぞれに抱える諸問題、農村と都市の格差、農村と都市の関係などについて考え、理解を深めます。

4.フィリピンという異文化に触れることにより、日本や私たちについて振り返る機会とします。日本とフィリピンの関係についても理解を深めます。

＜内容＞

実習Ⅰ（後期）事前学習、テーマ調査、旅行に向けた準備、現地でのインタビューや交流準備

実習Ⅱ（3 月上旬 8 日間）マニラ訪問、農村部訪問

実習Ⅲ（前期）グループワーク、テーマ別発表、報告書の作成

「国際協力実習」が抱えていた課題

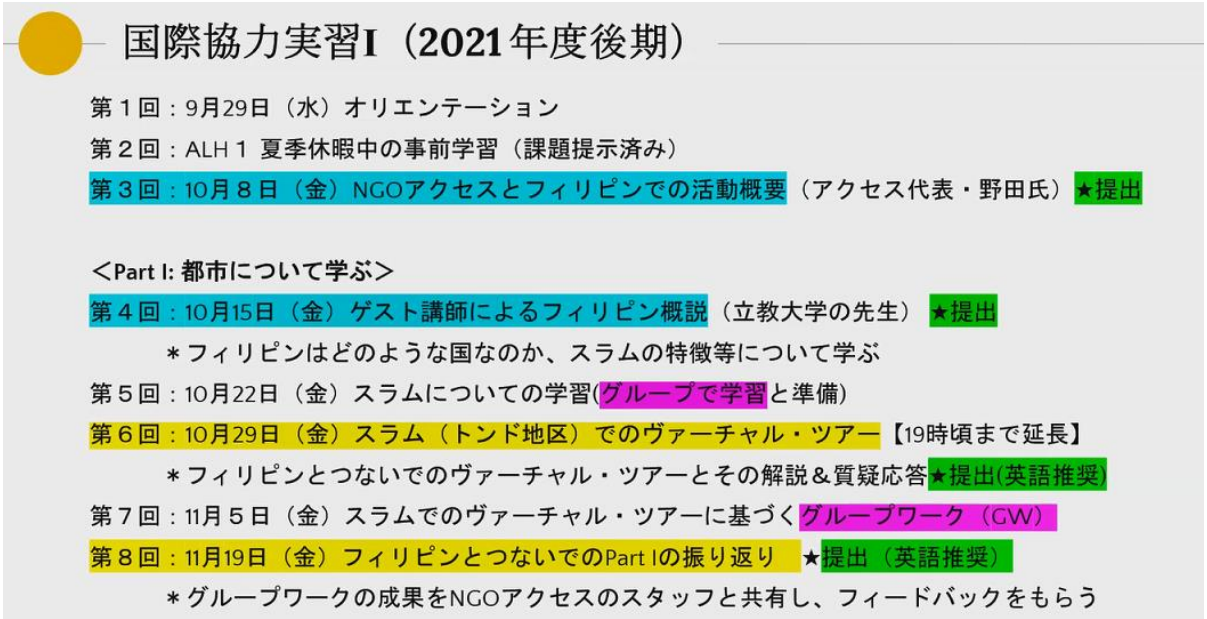
✓体調管理の難しさ（感染症等の対策、ハードな移動スケジュール、）

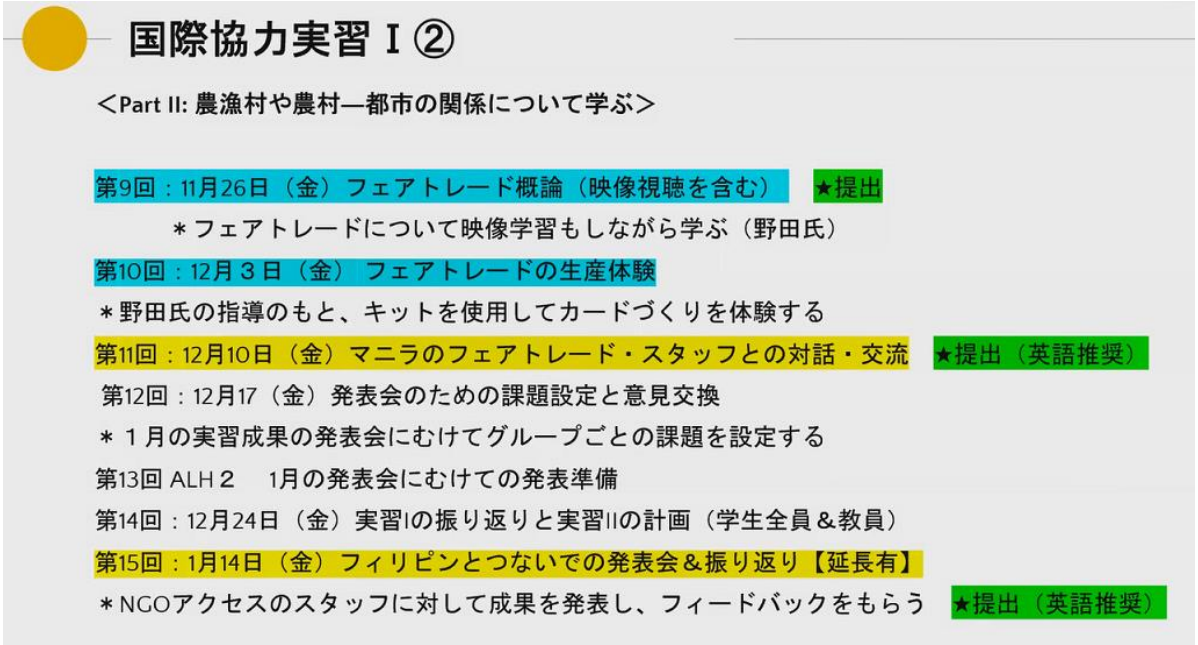
✓参加費（14 万円程度）に対する敬遠

✓帰国後の「国際協力実習Ⅲ」における振り返り、学びの定着度の問題

②After/With COVID-19 の「国際協力実習」

2020 年度はやむを得ず実習を延期としたが、必修単位であるため、2021 年度は認定 NPO 法人「アクセス」の協力のもと、オンライン実習を実施。また、現地スタッフがビデオを作成し、それをヴァーチャル・ツアーとして使用することで、現地実習の要素を含める形で、次のような実習を行った。



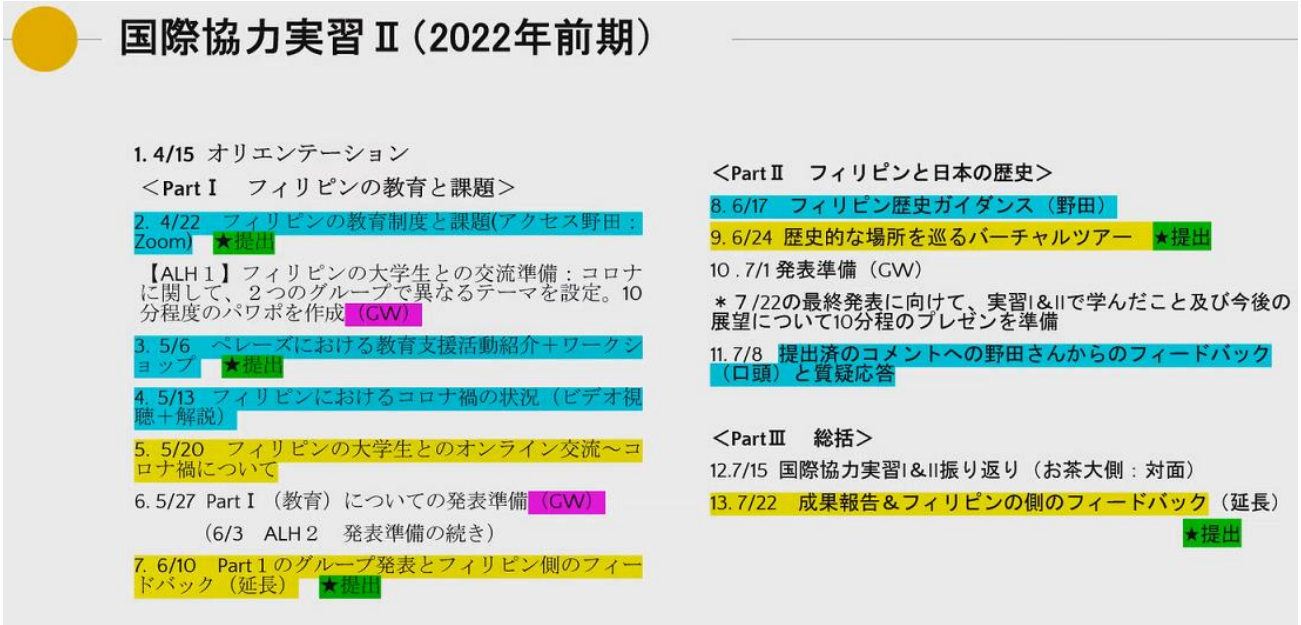


「国際協力実習Ⅰ」では、15 回の授業のうち、青色部分は国内（認定 NPO 法人「アクセス」）、黄色部分は現地とのオンラインでの実施とした。

＜Part1：都市について学ぶ＞では、第 6 回でスラム（トンド地区）でのヴァーチャル・ツアーを実施するにあたり、第 5 回であらかじめスラムについて学びを深めておき、第 8 回では学生の発表を現地スタッフの方とも共有して、フィードバックをもらった。

＜Part2:農漁村や農村－都市の関係について学ぶ＞では、第 9 回でフェアトレードについて学びを深め、第 10 回で実際にカード作りのキットを送ってもらい、フェアトレードの生産体験を行うことで、どのようなことを感じるのかを共有した。第 11 回では、現地のフェアトレード・スタッフとも対話・交流の時間を設けることができた。

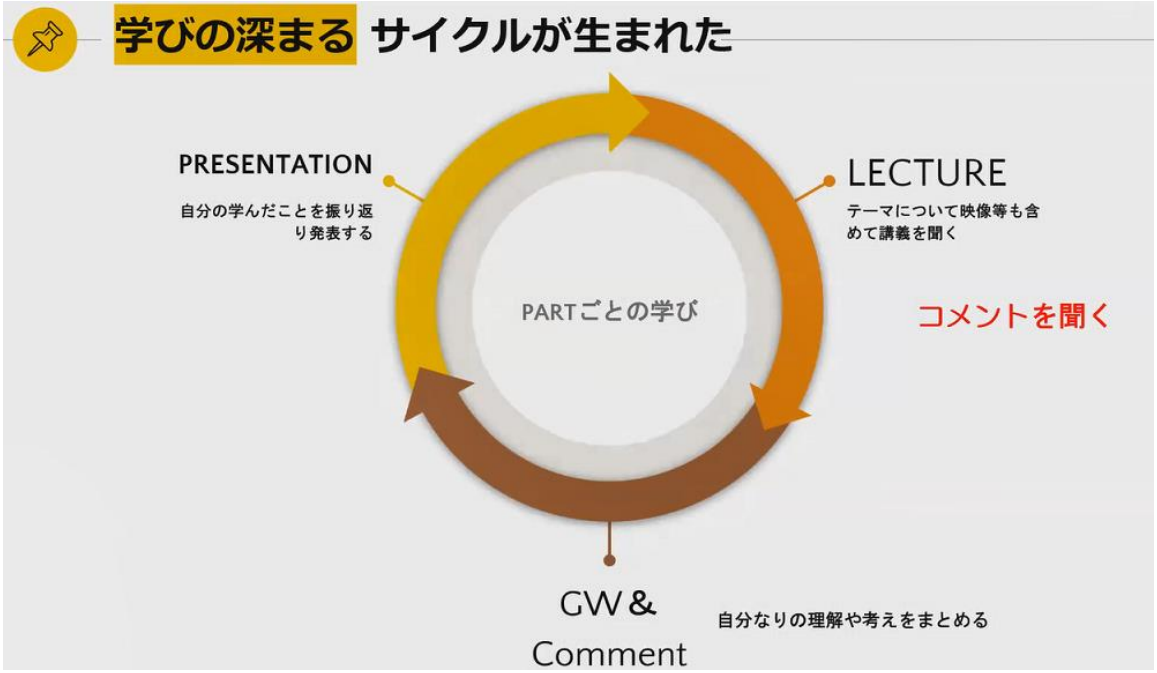
それぞれ学生が印象に残ったものを発表して、現地スタッフの方からもフィードバックをもらい、後期の授業を終了した。



「国際協力実習Ⅰ」が好評であったため、「国際協力実習Ⅱ」においても同様に、＜Part1:フィリピンの教育と課題＞＜Part2：フィリピンと日本の歴史＞においても、国内（認定 NPO 法人「アクセス」）と現地とのオンライン交流等を設ける形でフィードバックの機会を設けるよう工夫をした。

③オンライン実習の効果？意外にも良い効果が得られた！

講義を聞いて、自分の考えをまとめてプレゼンして、コメントをもらって振り返る。そのような学びが深まるサイクルが生まれ、参加した学生の振り返りが非常に充実していた。



現地で学ぶことの意味は大きいが、従来の現地実習は打ち上げ花火型であり、8 日間集中したものの深くは残らなかった。一方、オンライン実習では、学んだあとに時間をかけて振り返りを行えることで、深い定着につながったと思われる。

また、従来「国際協力実習」が抱えていた課題の解消にもつながった。

✓体調管理の難しさ（感染症等の対策、ハードな移動スケジュール、）　➡必要なし

✓参加費（14 万円程度）に対する敬遠　➡学生の負担金なし

✓帰国後の「国際協力実習Ⅲ」における振り返り、学びの定着度の問題　➡学びの定着度があがった

【質疑応答・感想】

Q：（倉光先生に対して）オンライン実習に切り替え、トレードオフする中での、マイナスな点はどのようなものがあったか。
A：学生からは「もっとフィリピンの人と直接話す時間が欲しい」という意見があった。現地に行く素晴らしさを伝えられなかったことは残念であった。また、日本においても、フィリピン人や文化に触れる場を設けることはできるが、やはりコロナ禍の影響で思うようにできなかった。

Q：（ウマリ先生に対して）オンラインによるインターナショナルな学びが出来ることがわかった。日本人学生が日本の伝統芸能を外国で学ぶのが面白いと感じた。その際の日本人学生のリアクションはどうだったか。
A：日本人学生は、外国人が日本の伝統に関心を持って学んでいる様子をみて、興味をもとうとする姿があった。

Q:（倉光先生に対して）今後の実習はどのようにしていく予定か。
A:まだ思案中。危機管理が年々難しくなってきている。オンラインを終えた後に、行きたい学生だけ自らエントリーしていくというのが望ましいと考えている。ただし、大学として現地に行くことを重要視するのであれば、それに従い模索していく。

Q:（倉光先生に対して）フィールドワークの実施にあたり、インタビューをお願いする方への交渉の段階から学生にさせているか。交渉の仕方の指導などはどうしているか。
A:交渉は NPO が代行してくれているので、学生も教員もやっていない。ただし、インタビューの内容については、どこまで踏み込んだ質問をしていいのか等あらかじめ NPO のスタッフ等に確認をしたうえで実施するようにしている。

（感想）現地実習を担当する教員としては、学生の体調管理、良質なホームスティ先の確保など頭を悩ませている。現地に行くことも重要だが、無理のない短めの期間を設定し、ヴァーチャルも組み合わせて学習するということでモチベーション高めることができるのではと感じた。

【全体のまとめ、今後の展望について】

今回の講演をとおして、お二人のコロナ禍における対応の実践例から、距離を超えて多様なゲストスピーカーを招くことで、学生の学びを深めることができる可能性、また現地での学びを大学の授業に組み込む難しさを、ヴァーチャルとの組み合わせで補完できる可能性があることを実感した。また何よりも学生にとって、学問としての定着が深まる可能性があることを踏まえて、これらをお手本に、本学でも今後の一つの授業運営の在り方として取り入れていきたい。

【参加者アンケートから】

事例紹介①（アンパロ・アデリーナ・ウマリ先生）の内容について

- 「国際交流」に関する可能性ということで、画面上ながら、リアルタイムに、直接お話やパフォーマンスをやり取りできるメディアの可能性を学びました。また、外国が身近になるこれからの時代、多くの言語を習得する意味も感じられました。ありがとうございます。
- ウマリ先生の経験（日本の外国人留学生）とそのネットワークが生かされたオンライン教育の実践は、参考になった。
- 能や文楽、生け花などのパフォーマンスをオンラインで実践していることに感銘を受けた。録画オンデマンドの活用などによって、巻き戻しや繰り返し再生などが可能となるので、むしろ細かい動きの解析などにおいて教育効果が高いこともありうる、と感じた。
- オンラインという手段が、講義形式の内容以外のもので大いに活用されている事例をきき参考になりました。
- 各国における講演・ワークショップをオンラインで共有することにより、より多角的な見方ができると感じました。
- 海外の事例を聞く機会は稀なため、新鮮であった。
- 学長も質問されていましたが、東京医科歯科大学の例として「外国人から日本の伝統文化を紹介される」講義は、留学経験者が「自国の文化をもっと知りたい、説明できるようにならねばと思った」と語るのと同じような効果が期待できるのだとわかりました。オンライン国際交流により、時間や渡航経費を抑制した形で、このような気づきや行動変容を促すことができることはもっと広く知られてよいと思いました。
- コロナ禍においての情報技術の発展はオンラインでの国際交流等で海外との距離をより一層短くしていることを実感し、また、FD のテーマからは外れるが、日本人は自国の伝統芸能に興味があまりない傾向にあり、外国の方が日本文化について日本人に伝えるという先生の取り組み自体に興味を持った。
- 世界や個々の状況が異なる場合でも、つながることさえできれば、学びのきっかけ、また興味・関心の継続にはかなり有効であることが事例を通して改めてわかった。

事例紹介②（倉光ミナ子先生）の内容について

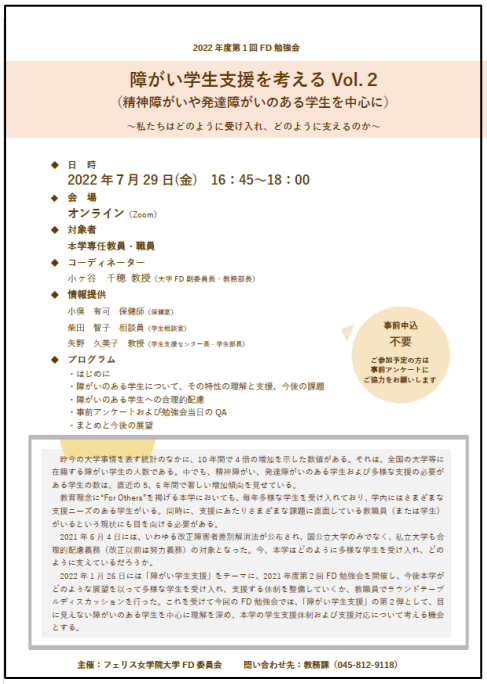
- 国境を超えて現地の声を聞くということ、それからきちんと課題を出してそのフィードバックを出すという労力も含めての充実度だと思います。教員やスタッフの方々のご苦労に敬意を評したいと思います。遠隔授業は、対面よりも、丁寧にやっていく必要があるのだという学びもありました。
- 具体的な事例とパワーポイントは、大変参考になった（コロナ前後の状況と取り組み）
- 踏み込んだ内容、特に引率面や費用面のこと、対面との併用について検討中であることなどもわかり、他大学も本学と共通した課題を抱えているということがわかって参考になった。学習面での定着率の高さについては、オンライン×長期間のサイクルという、この両面で教育効果が高まったのではないかと思ったので、現地実習＋長期間の準備＆振り返り、という形でプログラムを組みなおせるのではないかと感じた。
- かなり詳細な内容を伺う機会となり、本学にとって参考となるのではないかと感じました。
- オンラインツールを使うことにより学びに深みが出るという意見が参考になりました。
- オンライン実地研修によって、逆に学びが深まったというところが印象的でした。
- 具体的な授業プログラムと併せて説明があり、イメージがしやすかった。
- フィールドワークを取り入れた実習授業をどのように構成していくのか、対面、オンラインどちらも詳細な報告があり、自分の授業のデザインの参考にしていきたいと思います。
- 今後は「（入門編を）オンラインで参加➡さらなる探究（上級編を）現地実習」あるいは「現地実習➡帰国後の振り返りにオンライン活用➡学びの定着」という併用が主流になるであろうとよく理解できました。2020 年度以降、学生にもオンライン活用による発信力（瞬発力、プレゼン力）など求められる水準が上がっているように思います。大学だけでなく企業でも、危機管理やコスト面から、現地派遣せずに済む人を重用する傾向があるのではないでしょうか。オンライン国際交流経験だけでも、在学中に場数を踏むことができると学生には非常に有益だと思います。
- 他大学（お茶の水女子大学）のコロナ前、コロナ後の海外実習の事例についてデメリット・デメリットを客観的に把握することができた。また、With コロナ／After コロナにおいて、オンラインを使った授業（海外実習・プログラム）をより効果的な教育に繋げるための活用方法について整理する必要があるとも感じた。
- 協力団体があった場合は非常に効果的な授業ができるのだと分かった。
- もともとフィールドワークを授業に取り入れていた場合、コロナ以前よりかなり負担を感じている、という教員の声は多い。コロナは症状も個々によってかなり異なるため、自身の判断により学生を学外に連れ出して感染リスクを上げることには慎重にならざるを得ない、というジレンマを抱えている。短時間でも「学生を丸ごと預かる」という認識で責任感が強い教員ほどその傾向は強いように感じる。魅力ある授業は大学の魅力そのものになる。授業以前の教員の心理的負担や懸念に対し、大学のフィールドワークへの姿勢もあらためて問われていると思う。

第１回大学 FD 勉強会「障がい学生支援を考える VOL.2（精神障がいや発達障がいのある学生を中心に）～私たちはどのように受け入れ、どのように支えるのか～」

概要

日時:2022 年 7 月 29 日(金)　16:45～18:00
会場:オンライン(Zoom)
題目:障がい学生支援を考える Vol.2
　　(精神障がいや発達障がいのある学生を中心に)
　　～私たちはどのように受け入れ、どのように支えるのか～
プログラム
　①開催の経緯および趣旨の提示等
　②障がいのある学生について、その特性の理解と支援、今後の課題について
　③障がいのある学生への合理的配慮について
　④事前アンケート・勉強会当日の QA
　⑤全体のまとめおよび今後の展望について
司会・進行　：　小ヶ谷大学 FD 委員会副委員長(教務部長)
発表者:小俣　有可　保健師(保健室)
　　柴田　智子　相談員(学生相談室)
　　矢野　久美子　教授(学生支援センター長・学生部長)
対象者:本学専任教職員
主催:大学 FD 委員会
共催:学生支援センター
出席者:専任教員 19 名、職員 27 名
アーカイブ閲覧のみ:専任教員 3 名、職員 7 名

講演会ポスター


2022 年度第 1 回 FD 勉強会

障がい学生支援を考える Vol. 2
(精神障がいや発達障がいのある学生を中心に)
～私たちはどのように受け入れ、どのように支えるのか～

◆ 日　時
2022 年 7 月 29 日(金)　16：45～18：00
◆ 会　場
オンライン (Zoom)
◆ 対象者
本学専任教員・職員
◆ コーディネーター
小ヶ谷　千穂　教授 (大学 FD 副委員長・教務部長)
◆ 情報提供
小俣　有可　保健師 (保健室)
柴田　智子　相談員 (学生相談室)
矢野　久美子　教授 (学生支援センター長・学生部長)
◆ プログラム
・はじめに
・障がいのある学生について、その特性の理解と支援、今後の課題
・障がいのある学生への合理的配慮
・事前アンケートおよび勉強会当日の QA
・まとめと今後の展望

事前申込
不要
ご参加予定の方は
事前アンケートに
ご協力をお願いします

昨今の大学事情を表す統計のなかに、10 年間で 4 倍の増加を示した数値がある。それは、全国の大学等に在籍する障がい学生の人数である。中でも、精神障がい、発達障がいのある学生および多様な支援の必要がある学生の数は、直近の 5、6 年間で著しい増加傾向を見せている。
教育理念に"For Others"を掲げる本学においても、毎年多様な学生を受け入れており、学内にはさまざまな支援ニーズのある学生がいる。同時に、支援にあたりさまざまな課題に直面している教職員（または学生）がいるという現状にも目を向ける必要がある。
2021 年 6 月 4 日には、いわゆる改正障害者差別解消法が公布され、国公立大学のみでなく、私立大学も合理的配慮義務（改正以前は努力義務）の対象となった。今、本学はどのように多様な学生を受け入れ、どのように支えているだろうか。
2022 年 1 月 26 日には「障がい学生支援」をテーマに、2021 年度第 2 回 FD 勉強会を開催し、今後本学がどのような展望を以って多様な学生を受け入れ、支援する体制を整備していくか、教職員でラウンドテーブルディスカッションを行った。これを受けて今回の FD 勉強会では、「障がい学生支援」の第 2 弾として、目に見えない障がいのある学生を中心に理解を深め、本学の学生支援体制および支援対応について考える機会とする。

主催：フェリス女学院大学 FD 委員会　　問い合わせ先：教務課（045-812-9118）

開催にあたって　　小ヶ谷大学 FD 委員会副委員長（教務部長）

今回は「障がい学生支援を考える Vol.2」ということで、「精神障がいや発達障がいのある学生を中心に～私たちはどのように受け入れ、どのように支えるのか～」というテーマで勉強会を実施する。経緯としては、昨年度第２回本勉強会で「障がい学生支援」をテーマに、教育理念に「For Others」を掲げる本学が、多様な学生をどのように受け入れ、どのように「ともに学んでいく」機会を作れるか。そして今後本学がどのような展望をもって多様な学生と「ともに学ぶ」体制を整備していくことができるかを考える機会として、事例発表の後にディスカッションも行った。終了後のアンケート結果には、「シリーズ化または定期的に実施してほしい」、「目に見えない障がいなどさらにテーマを絞った企画を実施してほしい」といった要望があり、今回は第２弾として障がい学生支援についてさらに理解を深め、改めて考える機会とするために本勉強会を企画した。なお、今回は学生支援センターと共催で実施する。

障がいのある学生について、その特性の理解と支援、今後の課題について
～精神障がいの学生について～　　柴田　智子　相談員（学生相談室）

【相談室に来る学生の精神症状とそれに関する言動について事例紹介】

	発言	行動
①落ち込み	・やる気が出ない ・何をやっても意味がない ・もうダメだ ・死にたい	・授業の欠席 ・課題の未提出 ・意欲の低下 ・睡眠の低下（寝つきが悪い、眠りが浅い） ・入浴困難
②過活動な状態	・なんでもできる気がする	・いつも以上に話をする ・延々と話す ・考えが飛躍する

		・寝食を忘れて没頭する ・いつも以上にイライラしている ・焦りが目立つ
③不安	・いつも〇〇を考えて、やらないといけない事が手につかない ・これから〇〇が起きるかもしれない	・落ち着きがなくなる ・過呼吸 ・手足の震え ・涙が止まらない
④妄想と幻聴	・監視されている ・盗聴器を仕掛けられている ・家で見張られている	・妄想を確認する行動 （盗聴器を探す等）
⑤食行動の異常	・夜中に食べて吐いている ・満腹で気持ち悪くて下剤を使っている ・食べていない ・飲み物とゼリーしか飲んでいない	・実際に行動としてみることはないが、発言内容の行動をしている

【本学の学生 A さんの事例紹介】（略）

【今後の課題（心がけていること）】
・学生の体調や言動を受けての価値観で決めつけずに、ひとまず『そういう状態・状況』として把握する。
・できる限り学生の心情や背景を汲み取った対応をする。
・対応する際は一人で抱え込まない。

障がいのある学生について、その特性の理解と支援、今後の課題について

～発達障がいの学生について～　　小俣　有可　保健師（保健室）

【2021 年度第２回 FD 勉強会の振り返り、対応方法や現況について】
・昨年度の本勉強会では障害者施策の流れ、障害者差別解消法に基づく大学での対応、文部科学省の推進プランから読み取り、本学での支援などについても話をした。
・本学でも障がいのある学生の在籍者数は、年々増加傾向にある。（令和 2 年度は新型コロナウイルスの影響によりやや減少）
・障がいのある学生の増加に伴い、「学生状況連絡票」の発行件数も年々増加している。（内訳：全体の約半数が精神障害、全体の約 1/4 が発達障害）
・障がいのある学生の支援の申し出は、入学前から随時可能となっている。
・とくに 4 月の健康診断時には、「健康質問票」に障害手帳保持者及び支援を求めている学生を把握するための質問を入れ、保健室ではその回答内容をもとに学生支援を行っている。
・「学生状況連絡票」、「配慮依頼文書」は、いずれも根拠資料（診断書等）に基づき、発行している。
・障がい学生支援委員会では、合理的配慮や支援に関することを報告し、大学としての支援体制についても検討している。
・障がい学生特有の対応としては、学生の性格や二次障害、教育課程、家庭環境なども確認しながら個別性を重視しながら対応している。
・毎年教員には「学生支援センターガイドブック」を配布し、基本方針や相談窓口などの案内をしている。

【発達障害とは】
・発達障害とは、生まれつきの脳機能の発達の偏りによる障害である。
・得意・不得意の特性と、その人が過ごす環境や周囲の人との関わりのミスマッチから、社会生活に困難が生じる。
・周囲から発達障害の特性を「自分勝手」「わがまま」「困った子」「怠けている」「育ちが悪い」と批判されることもある。
・特性ゆえの困難さは、環境を調整し、特性に合った学びの機会を用意することで、軽減されるケースもある。
その学生の個性・能力・特徴・要望を理解したうえで、個別にサポートをしていくことが求められる。
・発達障害の種類：①自閉症スペクトラム障害（ASD）、②ADHD（注意欠如、多動性障害）、③学習障害（LD）
発達障害の中には、1 種類だけではなく①～③が併存している学生もいる。
・検査にはいくつか種類があるが、試験（90 分）のほかに幼少期から掘り下げて確認をしたり、自費で 2～3 万円くらい費用がかかったり、予約しても順番待ちのためすぐ受けられなかったり、正確に診断するには時間および費用がかかる。

・発達障害の中には、同じ刺激でも敏感に感じたり、逆に感じにくいなどの感覚処理が特異的な人がいる（感覚過敏・感覚鈍麻）。
・ADHD の学生が、学校生活での困りごととしては、長時間席に座っていられない、忘れ物が多い、集中の持続が難しい、整理整頓が苦手などといった例がある。
・発達障害の学生の中には、態度が悪く見えたり、真面目にやっているように見えなかったり、周囲から誤解されてしまい、学生本人が泣きながら相談に来ることもある。
・発達障害の中には、その場を乗り切ろうとわかりやすいウソをつき、誤解を招くこともある。
・支援の基本原則 SPELL：
①Structure（構造）情報をわかりやすく提示する
②Positive（肯定的）自己肯定感を高める
③Empathy（共感）本人の目線で支援する
④Low arousal（穏やか）低刺激な環境づくり
⑤Links（つながり）一貫性のあるサポートチーム
・現在は、発達障害の学生を支援するための便利アプリがたくさんある。（例：デジタル教科、Office Lens、音声付き教科書、GoodNotes、無音カメラ、Youtube など）

【本学の学生の事例紹介
～アスペルガー症候群*、注意欠如多動性（ADHD）の学生の入学から卒業までの支援について】（略）

(*当時の症名であり、現在は使用されていません。)

障がいのある学生への合理的配慮について

矢野　久美子　教授（学生支援センター長・学生部長）

・近年、障がいのある学生が増加しているため、大学全体で支援していく必要があり、今後組織的な支援体制を整えていくことが重要である。
・2016 年に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行され、2021 年には障がい学生の教育を受ける権利の保証が義務化され、私立大学でも合理的配慮が義務化された。
・本学では従来から障がい学生に対する支援活動に積極的に取り組んでいる。
・学内の支援体制としては、次のような組織がある。
学生支援センター、学生支援センター連絡会、学生支援センター運営委員会
障がい学生支援連絡会、障がい学生支援委員会
・情報共有の流れについては、主に 2 通りある。
大学全体：各連絡会・委員会での報告・審議 → 教授会・評議会で報告
個別：学生状況連絡票・配慮依頼文書 → 授業担当教員
・ひとりで対応するのではなく、また保健室・学生相談室に頼りすぎず、大学全体として障がい学生の支援をしていくことが大切である。

事前アンケート・勉強会当日の QA

質問①：

学生状況における「合理的配慮」について、どこまでが「合理的配慮」の範疇か、その線引きについて具体的事例をもとに説明してほしい。

回答：
例えば、現在、学習障害（LD）・注意欠如多動性（ADHD）の学生を支援しているが、この学生は、語学が苦手、横書きが読みにくい、アルファベットがくっついて見える、読み込みが難しいといった特性があり、支援対応として、フォントを大きくする、縦書きに変更する、行間を空ける、書面よりもデータを提供し、自分で拡大して読解する、筆記試験や提出物を手書きではなくタイピングで代用する、試験など択一式の回答方法に変更などの相談をするといった対応をしている。

学生状況連絡票に記載している配慮内容と考えられる対応の例

内容	対応事例
遅刻・欠席をすることがある	・欠席を補うために別の課題を課す ・オンデマンド受講を受けさせる
課題・提出物等の期限遅延について相談することがある	・提出期限の延長をする
授業内での発表、ペアワーク、指名されての回答に困難を伴う	・発表の順番を最後にする ・教員と個別にやり取りをする
横文字を読む・書くことが苦手、聞き取りながら書くことも困難な状況	・録音を許可する ・資料を提供する

可能な範囲で文書やメモでの伝達を希望する	・メモを渡す

質問②：

「合理的配慮」とは、「過度な負担がない範囲」ということが要件の一つとなっていると認識しているが、支援する側が主観的に「過度な負担」か、否かを判断するということでよいか。客観的な基準があれば教えてほしい。

回答：

支援する側が主観的になりすぎないよう、ある程度学生の要望にもそってほしい。教員と学生で調整をして、お互いに折り合いをつけてほしい。

例えば、試験時間を 60 分ではなく 90 分にする、事前に資料を送るなどの対応が考えられる。資料については、すべて先にお送りするのが難しい場合は一部でも要点だけでもかまわない。

もし学生の要望が過度な負担と感じる場合は相談をしてほしい。一緒に検討していく。

質問③：

教員が学生状況連絡票によって学生から遠隔受講を求められた場合、例えば同一の授業において、ある学生に対しては、その学生が遠隔受講をするしかない状況にあると捉え、教員にとって「過度な負担」とは感じず遠隔受講の対応をする。
しかし、別の学生に対しては、その学生がさほど厳しい状況ではない（対面でも受講ができそうだ）などと捉え、「過度な負担」と感じることから遠隔受講の対応をしないとした場合、公正性の観点から妥当と言えるか。

回答：

学生状況連絡票に「遠隔受講を相談することがある」とあった場合、公平性の観点から同一授業においては、学生の状況をヒアリングした結果、精査して記載しているため、遠隔受講可としてほしい。受け取った側からはさほど厳しい状況に見えないような時でも学生本人にとっては、厳しい状況もある。

質問④：

メンタルを病んでいたり、精神障害や発達障害と疑われる学生について、これまで保健室のアドバイスを仰ぎながら対応してきたが、一番悩むのは連絡が取れなくなった時に積極的に学生と連絡を取った方がいいのか、本人からの連絡を待った方がいいのかという点である。ケースバイケースかとは思うが、働きかけをしすぎて相手のプレッシャーになるのでないかと思う一方で、何かきっかけを作った方がいいのではないかと思い、いつも悩む。対処法について教えてほしい。

回答：

確かにケースバイケースではあるが、できれば連絡はしてほしい。大切なポイントは本人の困り感がどこにあるのか、求めている SOS は何かということである。

また、他の授業にも欠席しているのか、課題は提出していないのかなど、学科の中での情報共有や、先生から学生に連絡をとった後、保健室にも情報共有をしてほしい。共にサポートしていく体制を整えていきたい。

質問⑤：

学生が無断欠席や遅延提出、連絡が取れない時の理由として、学生から「精神的に不安定なんです。病院も通っていて、診断書も提出できます」と言われる時がある。そういったことを言われると、本来は指導すべきところではあるが、どのように伝えるか、どこまで配慮すべきか悩むことがあり、対応方法を教えてほしい。

回答：

保健室に相談するよう案内してほしい。診断書（根拠資料）をもとに校医面談をした上で、学生状況連絡票を作成し、先生へ提出する。

学生は、困ったときに申請したくなることが多い。

質問⑥：

新 1 年生は新しい環境での学びの中で、適応不安・ストレスや学習意欲の低下、さらに疲労感からいわゆる「燃え尽き症候群」のような症状を訴える学生が、5、6 月にかけて多いように感じる。こういった学生へのサポートをさらに充実させていくための検討も今後大学として必要ではないか。

回答：

毎年 GW 明けから相談件数も増え、学生状況連絡票を出してほしいと希望する学生も多い。

時期的なものと、困っている学生が相談できる場所を用意しておく必要もあるのではないかと考える。

例えば、他大学でも学習支援サポートを設置している。発達障害や学習障害の学生に対して、教員だけではなくチューターが学生を支援している大学もある。（発達障害の学生には、IT 系の操作などが苦手なものが多い。）

質問⑦：

障がいのある学生本人とは、直接・個別に対応することで問題が解決できても、障がいのある学生を含めてグループやチームという単位で指示を出す場面において、他の学生へのフォローをどうすべきか悩むことがあった。障がいのある学生のことについて、他の学生から相談された場合、どのように対応したらいいか。

回答：

診断名を言うことは憚られるので、対応方法が難しいところだと思う。診断名を言わないと伝わらないこともあるが、相談があった学生には、例えば「コミュニケーションのキャッチボールが苦手な学生かもしれない」「曖昧なニュアンスを理解するのが難しいのかもしれない」と伝える。

あとは、障がいのある学生本人の同意を得たうえで、具体的に困っていること、症状・状態・気持ちを伝えるといった対応方法も考えられる。

また、発達障害の学生の中には、自分の立ち位置がわからなくて困っている場合もあるので、役割を明確にしてあげると（例：書記をお願いする、プリントの印刷をお願いする）、学生本人もいやすい場所になる。

質問⑧：

成人年齢が 18 歳に引き下げられたいま、発達障害を持つ学生への「障害の告知」について、保健室・学生相談室はどのような考えを持っているか。

回答：

「障害の告知」は医者しかできないため、保健室からは本人の傾向・特徴や長所・短所などを振り返りながら伝え、時には共感しつつ、困っていることについて対処方法を提案する。直接「発達障害だから…」といったことは本人に言わないようにしている。

学生相談室でも本人の傾向・特徴として話す。そして、カウンセリングをしながら、本人が受け入れやすい対処法を提案するように心がけている。また、本人が現在受け入れられないようなことについては、あえて「言わない」と判断をすることもある。

まとめと今後の展望　：　小ヶ谷大学 FD 委員会副委員長（教務部長）

障がいのある学生の対応をする際、支援する側が見えていること以上に学生は深刻な状況だったり、複雑だったりすることがあるので、常にそういった点も踏まえ、予測しながら対応しなければならない。また、今回事例紹介の中でもあったが、障がいのある学生に対して個別の対応をするのではなく、教員も授業の対応や授業の作り方について改めて見直しを行い、多様な学生に適応できているのかという観点については、今後大学 FD 活動の中で考えていく必要がある。

【参加者アンケートから】

「障がいのある学生について、その特性の理解と支援、今後の課題について」の感想

・貴重な体験談、情報共有ありがとうございました。
・個別の事例への対処について教えていただきました。手厚い対応に感銘を受けると同時に、このような学生が一定数以上いたらとても手が回らなくなるのではということも心配になりました。
・貴重な体験談、情報共有ありがとうございました。
・実例も含めてお話しいただいたので、とてもわかりやすかったです。
・具体的な事例とともにお話をいただけたので、大変参考になりました。
・保健室・学生支援センターでの具体的な事例や対応方法について聞く事ができ、今後自分自身が 障がい学生を対応する際の心構え等の参考になると思いました。また、業務上あまり障がい学生に深く関わる事がないので、事例を聞いた際に驚きを感じた。

・フェリス生の具体的な事例に基づいたお話だったため、どちらも非常に印象に残った。特に目に見えない障がいであることから、今回の内容に留意しながら日々の学生対応に当たらなければならないと強く感じた。
・一人一人特徴も困りごとも異なる中、学生相談室、保健室ともに大変手厚い支援をされておられると改めて感謝する次第です。
・対応事例をいくつか紹介いただいたので、具体的な場面を想像しながらお話を伺えてよかった
・保健室や学生相談室で、具体的にどのようなサポートをしているかを知り、頭が下がる思いでした。学生一人ひとりと向き合うきめ細かなサポートは、無意識のうちに形成されたフェリスの伝統だと思いますが、その最たる実践であり、今後学生の多様性がますます進む中、フェリスが大いに誇り、広報していくべき事例であることを再認識しました。
・貴重な事例を提示してくださりわかりやすかったです。小俣さんの合理的配慮の説明がとてもわかりやすく、また普段学内で学生相談員のお話をお聞きする機会はなかなかないので柴田さんのお話も大変貴重なもので勉強になりました。
・大変な思いをしている学生がいることに胸が痛みましたが、全力でサポートされているご報告を受けてとても感動しました。
障がい学生の背景や置かれている状況が具体的にわかり、今後の授業運営や学生への対応においてたくさんのヒントをいただきました。ありがとうございました。

「障がいのある学生への合理的配慮について」の感想

・保健師さんと学生相談室のご対応に頼るだけではいけないと思いますが、素人の判断で教員が処理するのも、個人的には怖い気がいたします。かなり慎重でなければいけないと思いますし、そうであるならば、教員側のお勉強もしっかりと積んでいく必要があるかと思います。
・「わかりにくかった」わけではないのですが、「第 1 回で聞いた内容とかなり重複していた」印象でした。
・学生状況連絡票や配慮文書についての説明やその対応方法・事例を合わせて後の Q&A での回答を合わせて今後の対応の参考となった。
・個々人に頼った支援体制であり、組織として対応が必要であるという点が強く印象に残った。
・課題があることはよく理解できたので、勉強会の継続は必須と実感している
・学生支援センターだけでなく学内全体で支援していくということありがとうございます。
・大学組織としてどのように支援体制を組んでいるのかよくわかっていなかったので、それに関するご説明があってよかったです。

勉強会のご感想、ご要望等

・時間がなく事前の質問を提出できませんでしたが、聞きたかったことを他の先生が聞いてくださっていて、皆同じような悩みを抱えているのだと思いました。大変勉強になりました。
・いろいろな学生がいる中で、対応にはいつもヒヤヒヤしています。傷つけていないかなどと気を使う一方で、教育的な側面として注意しなくてはいけないこととのジレンマがあります。また、学生の精神衛生面への対応をかんがえる一方で、教員自身が精神的に健やかでなければいけないことを身を以て感じています。貴重なお話、情報をどうもありがとうございました。"
・感想としては、「目に見えない障がい」に関する説明や対応方法は一度聞いてみたいと思っていたので、非常に有意義な勉強会でした。ただ、職員だと当該学生が障がいを持っているのかわからない場合（＝印象として「そうかもしれない」と感じる場合）がほとんどなので、その場合の適切な対応について研修等を受ける機会があると良いのでは、と感じました（職員に限定される事かと思うので、FD 以外の場になると思いますが）。ありがとうございました。
要望としては、さらに理解を深めるための記事や書籍、サイトなどがあれば教えていただきたいです。また、差し支えない範囲で構わないので、成功事例／上手くいかなかった事例などがあれば後学のために伺いたいです。
・最後のＱ＆Ａを伺い、以前「合理的配慮」の対応をされている先生からご相談を受けたことなどを思い出しました。
・勉強会の開催ありがとうございました。今まで知り得なかった本学の障がい学生の症状や対応方法の具体的な事例について知り、非常に驚きを感じました。障がい学生についての情報はあまり共有しにくい部分があると思いますが、今回このような形で教員・職員全体に情報が共有された事に意義があると思いますし、情報が共有される事で対応方法等について一人で抱え込むといったことも減るのではないかと思います。
・今まで障害のある学生へのサポートについて学んだことがなかったので、とても勉強になりました。ありがとうございました。
・質疑応答でかなり具体的に回答していただけたのがよかった。今後教員等からの質問に回答する際の参考にしたい。

・普段学生対応に気を付けていても、瞬時の判断が難しかったり、見落としたりする部分が多々あるので、このように支援について考える機会があるのは大変ありがたいと思う。
・相談先がある、ということがわかり安心した
アーカイブ動画の後日公開があることがわかってよかった"
・ぜひぜひ第三段を開催していただきたいです。
・それぞれの特性が異なる以上、一人ひとりと向き合って対応していくしかないということ、そして現状学生支援センターが担っている部分がとても大きいということが分かりました。これからもサポートが必要な学生が増えていくと思われるので、チームフェリスとしてのサポート体制をうまく機能させる必要があると認識しました。
・日ごろからのお取り組みについて勉強になりました。ありがとうございました。
・都合がつかず当日は参加できなかったのですが、動画で視聴することができてよかったです。
・事例を多く伺うことができ、どのような配慮・工夫が必要かを具体的に知ることができてよかった。図書館での利用者サービスの中でも想像力をはたらかせながら、多様な学生のニーズに合う必要な配慮ができるようにしていきたい。

今後の本学における障がい学生支援の取り組みについてのご意見

・今回のような障がい学生の事例・対応方法の情報共有の活性化
・「チームフェリス」というキーワードが強く印象に残った。いつか皆が疲弊しきってしまうことを考えると、よりシステマティックな制度設計の構築が肝要であると思われる。
・プライバシーへの配慮は欠かせないが、事例/情報共有等の仕組みを作る等、より細やかで適切な対応につなげられるとよい
・勉強会の中でもお話がありましたが、学生支援センターのご負担がとても大きく感じています。業務上、守秘義務の関係上致し方ないところはあるかと思いますが、今回のように勉強会を通じて情報共有し、大学全体として取り組むという考えで学生支援していくことに賛同いたします。
・年々、このような生きづらさを抱える学生が増えているのを感じています。今後も様々な部署で連携して学生をサポートする必要があると思いました。またプライバシーの問題もありますが、各部署で気が付いたところをうまく他部署とも共有できたらと思います。そのような学生が来た時に何も知らずに対応してしまうことで、マイナスに働いてしまうことがありそうです。

第 2 回大学 FD 勉強会「JV-CAMPUS ～今後の展開の可能性を探る～」

概要

日　時：2023 年 2 月 15 日（水）16:30～17:35

会　場：オンライン（Zoom）

題　目：JV-Campus ～今後の展開の可能性を探る～

プログラム：
- ◆開催の経緯
- ◆JV-Campus の紹介
- ◆受入･派遣留学生に向けた展開の可能性
- ◆日本人学生に向けた展開の可能性
- ◆全体のまとめ、今後の展望について

対象者：本学専任教職員

主　催：国際センター、大学 FD 委員会

出席者：専任教員 22 名、職員 24 名

【開催の経緯】　荒井大学ＦＤ委員会委員長（学長）

COVID-19 パンデミックを経て、教育のオンライン化はさらに進展し、留学生及び研究者の国際的な交流も大きく変化する中、文部科学省は SGU 事業（スーパーグローバル大学創成支援事業）の一環として、オンライン教育を活用した日本の国際教育・交流を促進する新しいプラットフォーム（JV-Campus）を構想した。

2021 年度第 2 回大学協議会（2021 年 11 月 24 日開催）にて、本学では JV-Campus への参画に向けた検討を開始する方針が決定した。そこで、今回の FD 勉強会では、この JV-Campus に関する理解を深め、本学の参画意義等について考える機会としたい。

【JV-CAMPUS の紹介】　口井教務課長・今福国際課長

＜JV-Campus とは？＞

▶Japan　Virtual　Campus の略で、公式サイトでは「日本発のオンライン国際教育プラットフォーム」と説明されている。

▶戦略的パッケージ Box（ニーズに応じた複数の科目群を構成し、パッケージ化してユーザーに提供）、個別機関 Box（個別大学等の戦略に応じて独自に運営）の 2 つに分かれており、それをユーザーが選んで受講し学びを深めていく。

▶具体的な参加パターンは３つ。

①パッケージ提供：　一つの大学が単独で講義をパッケージ化し提供する。

②単純な科目等の提供：　各大学が個々の科目を提供し、複数大学でパッケージ化し提供する。または、各大学で個々に科目を提供する。

③多様な国際戦略コンテンツ提供：　大学紹介、オープンキャンパス、リクルートコンテンツなどを提供する。

＜JV-Campus の現状＞

▶参加機関は 46 機関。主に文部科学省がスーパーグローバル機関として選定した大学を中心に、大学以外の機関も一部参加している。

▶コンテンツの提供状況としては、各大学が独自に設定する個別機関 Box は多く提供されているが、複数の大学での戦略的パッケージ Box についてはまだ少ないと言える。

▶現在、「留学生増」「留学後教育」「留学啓発」につながるような共同コンテンツ案が募集されており、2023 年 4 月以降公開されていく予定である。

＜今後の展開の可能性＞
▶受入・派遣留学生に向けた展開の可能性のほか、日本人学生に向けた展開の可能性としては、オープンな教育リソースの活用という観点で、使用者・提供者の双方から利用していく可能性が考えられる。

＜JV-Campus のサイト構成とコンテンツ紹介＞
▶学習者サイトの構成：　コンテンツを探す（カテゴリで探す・コンテンツタイプで探す）、新着コンテンツ、JV-Campus 限定のオリジナル講座（日本語教育パッケージ・留学支援コンテンツ）の紹介、ウクライナ学生支援特別コンテンツなどから構成されている。
▶コース受講イメージ紹介：　選んだ科目の学習、内容確認テストや試験の進め方のイメージ紹介。個人登録を行うことで誰でも受講可能となる。オンデマンドに限らず、様々な授業形態を各大学で設定可能である。
▶日本語教育パッケージ（日本語を学ぶ外国人留学生対象）紹介：　レベルや技能ごとに検索することができる。現状としては、ここを入り口として各大学の HP にリンクさせている。

【受入・派遣留学生に向けた展開の可能性】　近藤国際部長

＜JV-Campus の目的／今後の JV-Campus＞
▶各大学での自由度が与えられている中で、それぞれの大学の留学生を迎えるにあったってのスケール感に応じた活用ができるのではないか。
▶今後の活用としては、高大連携やリカレント教育など幅広い活用の呼びかけもなされている。

＜受け入れ交換留学生・私費留学生に対して＞
▶JV-Campus を利用することで、大学 HP だけはなく、もう少し授業内容やプログラム等にも触れることができる。
▶本学における留学生の出願の流れとしては、日本に入国している留学生を対象としているため、今後、来日前に本学を知り、留学準備をして、海外から直接出願できる可能性も考えられるのではないか。

＜各大学の戦略に応じた JV-Campus の活用＞
▶本学の留学生に向けた展開としては、複数大学の連合的側面と、各大学の特色を生かした個性的側面、両面で次のような活用の可能性がある。
・複数の大学・機関による国際的にニーズのある科目群の共創
　「日本の女子大学で学ぶ意義 についての共同情報発信」
　「県内キリスト教大学ネットワーク企画　（例：キャリア　・　ワークショップ）」
・各大学・機関等が教育プログラムを充実させるために活用できる科目パッケージの創成
　「FERRIS+ 実践教養探求課程　・　プロジェクト演習」「海外実習科目事前講習」
　「短期海外研修事前講習」「国際都市横浜とフェリス」「フェリス女学院歴史資料館の情報発信」
　「ジャパンスタディツアー／日本事情」

＜留学生向け広報手段としての活用例＞
▶本学への出願を考えている留学生（日本語学校在籍学生）に向けた情報発信のツールとして活用できる。
▶私費留学生の主たる本学志望理由としては、「日本語学校・専門学校の先生の勧め」「友人・先輩の勧め」「その他（キリスト教の大学、女子大、立地、学びたい分野）」であり、いずれも JV-Campus の活用で本学を知ってもらうきっかけとなるのではないかと考える。

＜派遣交換留学生・派遣認定留学生・セメスターアブロード派遣留学生に対して＞
▶短期プログラム参加による留学準備教育の可能性：出発前に各国の治安や安全等生活事情を学ぶことが可能となる。
▶内容によっては「他大学等における科目等履修」による単位取得の可能性もあり得る。

＜短期研修参加希望学生に適した科目＞
▶ICC インターナショナル・コミュニケーションズ・カウンシルが JV-Campus と連携しているので、短期研修参加学生の留学前教育として活用していくことも考えられる。

＜JV-Campus の今後の可能性＞
▶JV-Campus が世界規模の大学コンソーシアムと連携するならば、より活用の幅が広がるのではないか。
　エラスムス計画 Erasmus Programme
　エラスムス・ムンドゥス・プログラム Erasmus Mundus Programme
　国際学生交換プログラム ISEP: International Student Exchange Program

アジア太平洋大学交流機構 UMAP: University Mobility in Asia and the Pacific
アジア・キリスト教大学連盟 ACUCA: Association of Christian Universities and Colleges in Asia

【日本人学生に向けた展開の可能性～オープンな教育リソースとしての活用】　小ヶ谷教務部長

JV-Campus に限らず、オンラインリソースを本学でどのように活用していけるかを 2 つの方向性から考えたい。

＜使用者－受信側として＞

▶本学にない専門分野（理数系分野、建築・工学系、美術系など）のコンテンツを利用して学びを深めることができるのではないか。

▶他大学の基礎教育のオンデマンド教材(アカデミック・スキルズなど)などを活用することも効果的である。

＜提供者－発信側として＞

▶大学の強みを生かしたコンテンツ（CLA 科目のシリーズ化、音楽の公開レッスン・演奏会など）を提供していく可能性もある。

▶学生活動の発信プラットフォームとして、「フェリスを綴る」を動画化したり、フェリス固有のプログラムや学生活動を紹介したり、ノウハウの紹介をしていくことなどが考えられる。ただし、クオリティの高いコンテンツ作成する上では設備やスキルも必要である。

【参加者との意見交換】

▶ジャパンスタディツアーにおける、広島・長崎の被爆者の体験談や、沖縄のひめゆり隊のお話などを聞く貴重な機会を 1 回で終わらせずに、コンテンツとしてまとめて提供していくことができると思う。また、フェリスの歴史をまとめて発信していくことも必要ではないか。

▶今後、JV-Campus を利用していく場合の単位認定の方法や大学での運用に関しては、どうするのか。

➡参画が決まったら、検討していく必要がある。

▶バーチャルキャンパスというのは、いわゆる没入型のバーチャルではなくて、Web に掲載し YouTube のようなイメージで学ぶイメージで間違いないか。

➡そのとおり。

▶国際的な動向について知りたい。JV-Campus の今後の広がりとか、各国との連携や想定しているユーザーの対象などはどのようになっているか知りたい。

➡コロナを機に世界中でオンライン受講できる講座も増えている。

➡ユーザーの対象によっては、学生は英語のコンテンツだと手が出ない可能性もある。

▶MOOC（ムーク）や Coursera（コーセラ）のように、世界の名物教授の講義など、ハイレベルな講座を提供するものというイメージではなく、ポータルとしてリンクを貼って閲覧する程度ならば、活用の余地はあると思う。

▶放送大学による単位認定はあまり活用されていない中、JV-Campus は活用されるのだろうか。

▶学科紹介レベルではなく、以下のような資格関係について、他大学の科目も積極的に取り入れていけたらよいのではないか。心理学の資格、データサイエンティストの資格、日本語教員の資格、社会調査士の資格。

▶データサイエンス共同利用基盤施設（ROIS-DOS）など（研究者向け）との連携を検討してはどうか。実際に、ROIS-DOS のデータベースは、データサイエンス科目で利用する予定。将来的に、全国 or 海外から、優秀な研究者を本学に招く効果もあると思われる。

▶留学生が母国に戻ってから、日本語能力の維持や学び直しのためにも活用できるのではないか。

▶すでに本学でも日本語教育のコンテンツを積極的に出していく議論が行われているのか。他大学の話によると、かなり大がかりな対応をしているので、本学の規模で対応可能なレベルや可能性を模索して、検討していく必要があるのではないか。

➡今がスタート。これから時間をかけて検討を進めていくことになる。

【全体のまとめ、今後の展望について】　荒井大学 FD 委員会委員長（学長）

JV-Campus に関する理解を深め、本学の参画について考える良い機会となった。留学生受け入れの面で本学を海外に紹介するツールとしても、国内の学生・受験生に向けて大学の様子を伝えるツールとしても活用を検討していきたい。

まずは、本学の特色を紹介するものとして、例えば、本学独自のコンテンツとして、フェリス学やジャパンスタディツアー等を提供していくことから始めてはどうかと考えている。そして、JV-Campus というプラットフォームから、多くの留学生・学生・受験生などを本学の公式 HP に誘導することが大切である。

【参加者アンケートから】

「JV-Campus の紹介」に対する感想

・わかりやすかった。概要が理解できた。
・分野によっては著作権の問題があり難しいなあと思いつつ、身近なところから始めていくことは大切かと思いました。「受験生確保」よりも「大学の知の還元」から始める方がうまくいくと考えます。
・とてもわかりやすかったです！
・良かった
・まだ活用のイメージがしっかりとできているわけではないですが、上手く活用することによって、広報にも繋げられるコンテンツなのではないかなと思いました。
・様々な可能性や利用価値を秘めたプロジェクトであると感じます。経費的、人的に許容されるならぜひ参画を。
・要点がまとめられており、理解しやすかったです。

「受入・派遣留学生に向けた展開の可能性」に対する感想

・学生の PR につながると思ったので、広報の側面で活用できるコンテンツであると感じた。
いろんな可能性がありそうですね。現地実習の事前・事後講座に使えそうかもですね。
・本学学生の海外（短期）留学準備としての利用は、可能性として十分考えられるのではないか。留学生へのフェリス紹介のコンテンツも、あると良いと思う。
・受検前や入学前にフェリスのことを知ったり、日本語を学ぶことができるということに繋げられるのは、良いことだなと思いました。
・戦略的パッケージ Box では日本語のみが動き出していることから、導入のしやすさや、目的との一致の度合いが高いと判断できるため、留学生へのアプローチから展開していくことは間違っていないと思います。
・留学生獲得のために、キリスト教に力を入れている印象を与えるコンテンツは有効だと考えました。
（実際、毎日チャペルをやっているキリスト教主義大学はとても珍しいです）特にアジアやアフリカ、南米などでは、クリスチャンそれも熱心なタイプの割合が高いです。「日本のキリスト教主義大学と言えばフェリス」のイメージを与えることができれば、大きな訴求力を持つと思われます。
・まず、大学として留学生を増やしたいのか、今の現状のなかで留学生の招致にリソースをさくことができるのか、ビジョンを示すところから始める必要があると思います。

「 日本人学生に向けた展開の可能性」に対する感想

・今後どのくらい、どのように、いつごろから参画していくかは議論が必要ですね。あとは、入学前教育や生涯学習講座なども可能性としてあるかもですね。
・JV-Campus のみならず、世界規模での同様の企画には積極的に参入すべきと考えます。その際に、学生向けであっても、研究者向けのものにも可能な限りアクセスし利用できるようにしておくことが肝要と考えます。最も大規模でデータの質が保証された研究者向けデータを、大学教育に導入できることが高品質の授業保障にもつながり、大きな教育効果も得られると考えます。
・本学にはない分野を学びたいという時に利用するコンテンツとして、活用できるのではないかと思いました。
・コンテンツに無限の可能性があることや、それに伴って方向性や大学らしさの基準を学内で持つことが重要であることがわかりました。また、こういった+α の環境が整う＝教員・事務職員の負担増加が懸念されるなと感じました。
・フェリスの広報になるような形で・・・というのは虫がよすぎるような気もします。現状では、そのような形でこのサイトを使用している大学はないのではないでしょうか。ただ、たとえばジェンダーについてのリレー講義を提供するという形なら有意義かもしれません。

学修行動調査

2022 年度も FERRIS 学修行動調査、ALCS 学修行動比較調査を実施しました。ALCS 学修行動比較調査は他大学と共同で行うため、本学の強み、弱みを浮き彫りにし、今後取り組むべき課題を明らかにすることを狙いとしています。

【Ferris 学修行動調査】

目的	(1) 学生の学修状況(学修時間の実態や学修行動)の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証
対象者	学部学生 2 年次生・4 年次生
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能
実施期間	4 年次:2022 年 9 月 21 日(水)～9 月 30 日(金) ※9 月卒対象者 2 年次:2023 年 3 月 22 日(水)～4 月 11 日(火) 4 年次:2023 年 3 月 23 日(木)～31 日(金)
回答率	第 10 回:43.2%(2023 年 3 月 22 日付在籍者数:1,188 名、回答者数:513 名) ※2022 年度 9 月卒対象者含む(10 名) 参考:42.0%(2022 年 3 月 17 日付在籍者数:1,285 名、回答者数:540 名) ※2021 年度 9 月卒対象者含む(23 名)
設問の概要	(1) 時間の使い方 (2) 授業での経験 (3) 学修への取り組み (4) 授業に対する意識 (5) 入学後から現在までの学修行動についての自己評価 (6) 本学の教育への満足度 (7) その他

【ALCS 学修行動比較調査】

目的	(1) 学生の学修状況(学修時間の実態や学修行動)の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証 (3) 他大学間との比較分析による現状把握
対象者	学部学生 1 年次生・3 年次生
実施方法	専用 Web サイト
実施期間	2022 年 12 月 12 日(月)～2023 年 2 月 13 日(月)
回答率	53.5%(2022 年 11 月 15 日付在籍者数:1,015 名、回答者数:543 名) 参考:52.7%(2021 年 11 月 9 日付在籍者数:1,152 名、回答者数:607 名)
設問の概要	(1)経験(学修に関する経験) (2)時間(時間外の活動量) (3)成長(学修による変容の自覚) (4)満足(学修関連の満足度) (5)希望(学修に関連して望んでいること)

授業アンケートと授業改善計画

2022 度も授業アンケート及び授業改善計画を実施しました。授業改善計画は、授業アンケート回答に対する担当教員からの応答により、学生が自身の今後の授業への取り組み方や学修活動の振り返りにヒントを得ることを目的としたものです。授業改善の参考資料として引き続き活用いたします。

【授業アンケート】

対象	全科目	
実施方法	FerrisPassport の授業アンケート機能利用	
実施期間	前期	授業アンケート(通常科目):2022 年 7 月 15 日(金)～28 日(木) 授業アンケート(集中講義):第 1 ターム　8 月 1 日(月)～16 日(火) 第 2 ターム　8 月 29 日(月)～9 月 9 日(金)
	後期	授業アンケート(通常科目):2023 年 1 月 17 日(火)～1 月 30 日(月) 授業アンケート(集中講義):第 1 ターム　2 月 6 日(月)～2 月 16 日(木) 第 2 ターム　3 月 7 日(火)～3 月 16 日(木)
回答率	(前期)20.7%　(後期)14.9%	

【授業改善計画】

対象者	全教員	
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能利用	
実施期間	前期	授業アンケート(通常科目):2022 年 8 月 1 日(月)～8 月 22 日(月) 授業アンケート(集中講義):第 1 ターム　8 月 19 日(金)～9 月 2 日(金) 第 2 ターム　9 月 13 日(火)～9 月 27 日(火)
	後期	授業アンケート(通常科目):2023 年 2 月 1 日(水)～2 月 22 日(水) 授業アンケート(集中講義):第 1 ターム　2 月 18 日(土)～3 月 10 日(金) 第 2 ターム　3 月 18 日(土)～3 月 31 日(金)
提出率	(前期)92.2%　(後期)73.6%	

卒業生調査

卒業生という外部の視点からも本学の教育の成果・効果を明らかにし、本学に対する期待、要望を把握することを目的として卒業生調査を実施しています。

大学時代にもっと熱心に取り組めばよかったと思う授業としては、毎年、語学科目や共通科目が挙げられます。自分の所属学科の科目だけではなく、幅広い関心を持つことの大切さを実感していることが分かります。また、本学で学んだ／出会ったことで今「とても役に立った」と思うこと（自由記述）の設問からは、大学で学ぶ知識や経験のほかにも、For Others の精神、様々な人との出会いを糧にそれぞれ社会で活躍されていることが分かる結果となりました。

また、2022 年度からは在学生に対して、このように様々な環境にいる先輩たちが、自身のフェリスでの学びを振り返った時に感じていることを共有して、より充実した学生生活を送ることができるようメッセージを発信しました。

今後、本アンケートを継続して、カリキュラムの一層の充実を目指します。

【調査及び結果概要】
実施期間：2022 年 10 月 14 日～11 月 15 日
実施方法：葉書で依頼し、web にて回答
対象人数：499 名（2016 年 3 月出学者）
有効回答：70 名（回答率 14.0%）

PBL 科目の推進

中期計画 21-25 PLAN のひとつである「PBL 科目の推進」として、PBL 科目における学生の活動経費（交通費等）の補助が挙げられます。

2022 年度は、支援対象科目 3 科目（履修者数 37 名）のうち、申請のあった 10 名に 20,817 円（予算執行率 20.8%）の支援を実施しました。

大学院の FD 活動

2020 年度より、教育能力向上を目的として、大学院博士後期課程学生にプレ FD を実施することが、大学 FD 活動計画に明記されました。対象の大学院生は、大学 FD 講演会や授業参観に参加して「FD 活動報告書」を提出しました。

授業参観に参加した大学院生は、語学の授業において 4 技能をまんべんなく練習できる活動を組み入れることの大切さを学び、自らの授業を振り返りました。

2022 年度活動内容

期間	テーマ、トピック	主催
4 月 1 日（金）	FD オリエンテーション	英語教育運営委員会
4 月 4 日（月）	新任教員対象アカデミック・アドバイザー説明会	大学 FD 委員会
6 月初旬～7 月中旬	前期授業アンケート実施（授業への要望）	大学 FD 委員会
6 月 10 日（金）～30 日（木）	専任教員による授業参観（対象：専任教員担当科目）	大学 FD 委員会
7 月中旬～9 月中旬	前期授業アンケート実施（学生の自己評価・成長）	大学 FD 委員会
7 月 29 日（金）	第 1 回大学 FD 勉強会「障がい学生支援を考える Vol.2 （精神障がいや発達障がいのある学生を中心に） ～私たちはどのように受け入れ、どのように支えるのか～」	大学 FD 委員会 学生支援センター
8 月初旬～9 月下旬	授業改善計画	大学 FD 委員会
9 月 21 日（水）～30 日（金）	Ferris 学修行動調査（対象：4 年次生※9 月卒対象者）	大学 FD 委員会
9 月 24 日（土）	FD 勉強会「授業実施方針等の説明、英語教育に関する意見交換・情報共有等」	英語教育運営委員会
10 月中旬～11 月中旬	教育の質向上に向けた取り組みー卒業生調査	大学 FD 委員会
11 月中旬～1 月中旬	後期授業アンケート実施（授業への要望）	大学 FD 委員会
11 月 7 日（月）	大学 FD 講演会「With コロナ／After コロナにおける授業のあり方を考える」	大学 FD 委員会
11 月 16 日（水）	FD 勉強会「プログラミング環境の現在ーテキスト分析を例としてー」	文学部コミュニケーション学科
11 月 16 日（水）	FD 勉強会「留学生科目のカリキュラム編成について」	留学生科目委員会
12 月 7 日（水）	FD 勉強会「カリキュラム改善に向けた学生養成と就職率向上について」	音楽学部
12 月中旬～2 月中旬	ALCS 学修行動比較調査（対象：1・3 年次生）	大学 FD 委員会
1 月中旬～3 月中旬	後期授業アンケート実施（学生の自己評価・成長）	大学 FD 委員会
2 月初旬～3 月下旬	授業改善計画	大学 FD 委員会
1 月 18 日（水）	FD 勉強会「学校でアライになる～多様な生徒への対応～」	教職課程
2 月 2 日（木）	FD 勉強会「初習外国語 「総合 」 科目の 課題と取り組み」	初習外国語教育運営委員会
2 月 15 日（水）	第 2 回大学 FD 勉強会「JV-Campus ～今後の展開の可能性を探る～」	大学 FD 委員会
2 月 22 日（水）	FD 勉強会「本学における今後の日本語教員養成講座のあり方について」	日本語日本文学科 日本語教員養成講座委員会
2 月 25 日（土）	FD 勉強会「卒業論文について」	文学部英語英米文学科
3 月 8 日（水）	FD 勉強会「CLA としてのデータサイエンス」	CLA コア科目運営委員会
3 月中旬～4 月中旬	Ferris 学修行動調査（対象：2・4 年次生）	大学 FD 委員会
4 月～2 月	教育の質向上に向けた取り組みーPBL 科目の推進	大学 FD 委員会
4 月～3 月	教育の質向上に向けた取り組みー大学院の FD 活動	大学 FD 委員会

以上